平成２８年度「学力・学習状況」検証事業研究状況報告書（概要）

1　学校紹介

柏市東部に位置し、学区内には柏市役所沼南庁舎、沼南公民館、消防署、郵便局、銀行などの公共機関があり、多くの商店も集中している。４月末より地域に大型ショッピングモールができ、今後もさらににぎわうことが予想される。学校の前を県道柏～印西線、東を県道船橋～我孫子線が走り、交通量は大変多く、交通安全対策には十分留意している。近年沼南地区の宅地開発が進み、児童数が増加している。そのうちかなりの児童がバス通学をしているため、登下校の配慮が必要である。

2　研究主題

子どもたちが学習に主体的に取り組むための
「教科別教職員研修」と「家庭学習推進」のシステム化

3　研究の概要

（１）全国学力・学習状況調査の結果における特徴と分析

共通して，記述式に課題が多い。問題文や文章を最後まで読んで全体を把握し，自分の言葉でまとめる力に課題があると考えられる。一問一答式の知識を取り入れるだけの学習ではなく，児童一人一人が課題を把握し，自分の考えを持ち，仲間と検討し合い，自分の言葉で表現をできるような授業のシステムづくりをしていかねばならない。

また、学校から与えられる課題のみに取り組む宿題ではなく，自分の課題をもち，じっくりと考えてまとめる時間を家庭学習に設けていく必要がある。

本校で注目しているのは、誤答だけではない。空欄であるということは、時間が足りなかったという事も考えられるが、全く手をつけておらず、はじめから諦めてしまっているとも考えられる。このことを深刻に受け止め、「課題に対し、最後まであきらめずにやり抜く力」をつけさせることがまず、本校の大きな課題であると考えた。

（２）学力向上のための取組とその成果

①　若手を育てる「教科部会校内研修」

児童が主体的に学び、基礎基本を身につけ、問題解決をやり抜く力を身に付けさせるには、学校の授業が第一である。

今年度、本校は、柏市「みんなでつくる魅力ある学校」平成 28 年度実施校となっており、教育委員会と学校が一体となって授業モデルをつくり、授業提案、協議をすることによって、提案する教員及び参加した教員の指導力向上を目指す。これは、東葛飾教育事務所の指導室訪問を兼ねている。

本校は職員数も多く、部会を一つにすると、一部の教員の意見のみで終わってしまうことがあり、特に若手教員の意見や考えをとりあげる機会が少なくなる。部会を分化することにより、若手の考えや意見を取り上げやすくなった。

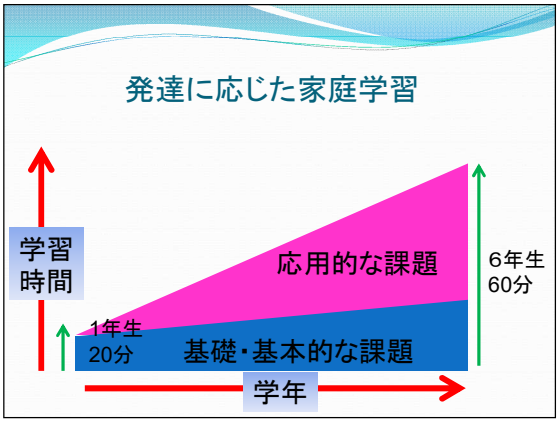
全体の研究テーマは、「自分の思いや考えを主体的に表現する児童の育成～全教科・領域を通して～」である。全体の研究テーマをもとに教科部会の視点で研究を図った。

教科部会ごとに教育委員会から継続的に講師を呼び、必要であれば外部講師に依頼した。

講師から直接学ぶ時間や回数が多く設けられたことは大きな成果であった。

② 学習習慣から意欲的な学習へ導く「家庭学習のすゝめ」

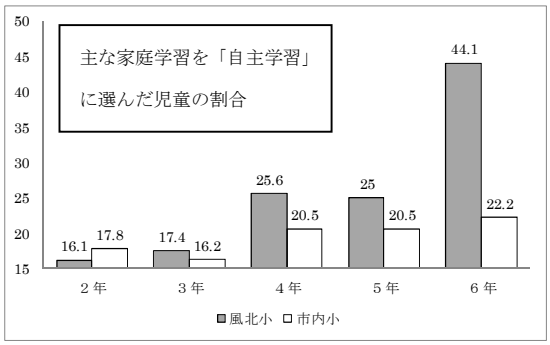
各々の児童が、自分の課題に向けて最後までやり抜く力をつけさせるためには、家庭学習の時間は重要である。



本校は、バス下校児童が多く、下校時刻が固定されるため、放課後に補習をする時間の確保が難しい。家庭学習の習慣作りが大切になってくる。

平成２６年９月より、各家庭に「風っ子家庭学習のすゝめ」、学年ごとに家庭学習の目標と目安を配付し、全校で取り組んでいる。

低学年は、計算問題や漢字練習、音読など基礎的な学習で習慣作りを促し、高学年になると、自ら課題を見つけて学習をしたり、調べ学習などの発展的な学習をしたりするように励ましていった。



平成２８年度の市内学力調査によると、主な家庭学習を「自主学習」に選んだ児童の割合が、市内の他校の平均と比較しても２倍程度高い。

５年生において、「家庭学習コンテスト」と題し、家庭学習の方法を学校で行い、児童がお互いに見合う授業を行った。これは、児童の家庭学習についての意欲を高める結果が表れており、学力向上を期待されている。

4　今後の課題

（１）研修のあり方については、指導主事や講師を迎えやすい体制ができた。しかし、教科枠を広げたため、それぞれの深い学びを共有することに課題があった。教科を絞り、どんな学力を向上させるか焦点を絞り、検証していく必要がある。

（２）加配教員については、本校のように学級数の多いところでは、授業に入るだけでは、限られた学級に対する成果しか上げられない。多くの学級に有効に働きかけるような活用方法も考えていく必要がある。

（３）家庭学習は、家庭にすべてを任せるのではなく、学校と家庭が連携していくことで、児童の学習意欲を高めていく必要がある。さらに、次年度より中学校との連携をし、９年間の家庭学習モデルを作成して進めていく。学校間で共通理解を図っていかねばならない。